

思春期・青年期における未来展望の様相の発達の検討：「希望」と「展望」という視点から

飛永, 佳代
九州大学大学院人間環境学府

<https://doi.org/10.15017/10281>

出版情報：九州大学心理学研究. 8, pp.165-173, 2007-03-31. 九州大学大学院人間環境学研究院
バージョン：
権利関係：

思春期・青年期における未来展望の様相の発達の検討

—「希望」と「展望」という視点から—

飛永 佳代 九州大学大学院人間環境学府

Developmental Changes in future time perspective in adolescence —Hope and Perspective—

Kayo Tobinaga (*Graduate School of Human-Environment Studies, Kyushu University*)

The purpose of this study is to consider developmental changes of the contents of future time perspective from the viewpoint of “hope” and “perspective.” “Hope” was assumed as the side of the self vague future like a wish and dream. “Perspective” was assumed as the side of the consciousness to the self future near the realistic prospect ‘it is probably like this’. Both the fifth graders in an elementary school and eleventh grade students conducted question paper investigation to a total of 1729 students. As a result, it was shown from the differences in the contents side that “hope” and a “perspective” are the sides in which quality is different, and it was shown that it is what changes in development. Moreover, every grade of “hope” and a “perspective” being in agreement within an individual is 40%, and it was shown that 60% of child differs in him about oneself of “hope” and as a “perspective.” Furthermore, it was shown that the past image, the present image, and the future image are related strongly mutually.

Keywords: future time perspective, hope, perspective

1. 問題と目的

時は「過去」から「未来」へと絶え間なく流れている。時計的・カレンダー的な時間軸上では、時間は一方向的に等間隔で進んでいく。しかし心理学的な「時」の流れの感じ方や捉え方はもっと複雑なシステムから成り立っている。例えば何十年経っても昔の出来事を後悔していたり、どんなに苦境に立たされても将来の夢に向かって頑張れたりというエピソードもよく聞く。「過去を引きずる」とか「未来に向けて今を生きる」というような表現の仕方があるように、過去・現在・未来は相互規定的であり、有機的な関連性を持っている(都築, 1999)のである。

これまで心理学的な時間の捉え方に関しては時間的展望(time perspective)すなわち「ある一定の時点における個人の心理学的過去及び未来についての見解の総体(Lewin, 1974)」という概念に基づいて研究が進められてきた。時間的展望の未来の側面である未来展望(Future-Perspective)をめぐることは、これまで多数の研究が積み重ねられており、現実の人間生活において未来、特に未来への希望が果たしている重要な役割が指摘されている。

これまで、時間的展望の長さや広がりにおいては多く

の結果が得られており、社会階層、非行経験、精神病理などと時間的展望の長さとのが示されてきた。しかし時間的展望という概念は認知的側面から感情的側面までも含む広い概念ゆえ、いまだ時間的展望についての理論的検討と実際の実証的研究においてはギャップがあることが指摘されている(都築, 1999)。臨床心理学ないし精神病理学的観点からは早くから個人の過去の体験こそが重要視されてきた。しかし近年、Erickson(1954)ら「未来志向」的な心理的援助が脚光を浴び、心理療法領域においても個人が捉える心理学的「未来」の重要性の認識が広まっている。都築(1982)は、ある個人が自分の人生において、どのような内容の目標や希望を思い浮かべているか、又それに対していかなる意味づけをしているのか、という時間的展望の中身を質的に明らかにすることが重要であると述べている。今後心理臨床的援助への発展を踏まえても、まず個人がどのような未来像を描いているのかという心理学的未来、つまり未来展望の内容面を質的に検討することが重要であろう。それでは未来展望とはどのような内容から構成されているものだろうか。

心理学的未来として希望の重要性は早くから強調されてきた。レヴィン(1954)は希望を「そのうちいつかは、こんな状態が変わっておれの望みどおりになることもあ

ろうということ」と定義した上で、「個人は未来を時にはあまりにもバラ色に彩られたものと見、ときにはあまりにも色褪せたものとみるが、個人の未来像がその時々により正しいにしろ正しくないにしろそうした像は、その時の個人の気分や行動に深い影響を及ぼす」と指摘した。このように未来への希望が現在の生活に与える影響の重要性は多くの研究者が指摘するところである。また、このように希望にまつわる研究を概観すると、希望を目標という視点から捉える点で共通しているが、具体的な目標として捉える考え方から、もう少し抽象的な目標までを含めて捉える考え方までその捉え方には違いがあり、未だ一定の見解は得られていない(都筑, 2004)。

森・黒澤(2002)は「未来時間イメージ」には3水準あると述べた。第Ⅰ水準としては「こうあらねばならない」という義務・必要の水準、第Ⅱ水準としては「こうなればいいな」という願望・夢の水準、そして第Ⅲ水準として「きつとこうなるだろう」という未来完了進行形の水準であり、第Ⅲ水準が最も現在に対する規定力が強いと指摘した。またレヴィン(1954)は「幼少の児童には空想と現実とがはっきりと区別できない。願望や恐れが大きく判断に影響する。個人が成熟して『自己統制』ができるようになると、願望と期待とをもっとはっきりと区別するようになる」さらに「時間的展望のひとつの側面はリアリズムである。」と指摘しており、心理学的未来にはリアリズムすなわち現実性を基準とした水準の異なる側面で構成されていることを指摘している。つまり、心理学的未来を考える際には、現実性の水準を考慮し検討する必要がある。

よって、本研究では未来展望の内容は、現実性を基準にして「希望」と「展望」という2つの側面から構成されると仮定した。すなわち希望とは「未来において、望ましい何かが実現ないし達成されることへの願望であって、期待を伴ったもの(勝俣, 1992)」である。「夢」などファンタジックな内容も含まれ、漠然としていても未来における自己の肯定的な意識を持つという側面を「希望」と捉えることとした。一方、「展望」は現在の自己を視座にもったものでありより現実的で具体的な自己の未来への意識の側面と仮定した。例えば進路や職業選択のように現実的な選択を求められる際、「こうするだろう」といった見通しに近い具体的な未来の側面を「展望」とした。希望は漠然としていても「何かいいことがあるかもしれない」という意識であり、それがあからこそ自己の可能性を拓いていけよう。しかしそれだけでは現実生活で自分の人生を選び取っていくということまでつながらないだろう。「展望」とは「こうしているだろう」といういわば「見通し」である。しかしながら「希望」が欠如した中での「展望」は空虚なものになるであろう。よってこの「希望」と「展望」は相互に関連すると考え

られ、そのバランスで「未来展望」が構成されるのではないかと考えた。

よって本研究では未来展望の中身と捉える「希望」と「展望」がそれぞれどのような内容から構成されるのかを検討することを目的とする。さらに、進路選択等で未来展望がもっとも焦点化される青年期に注目し、それが発達に伴いどのように変化するのも検討する。また、都筑(2004)は未来は今から照射するものであり、現在の意識のありようが未来の見方に影響すると述べた。それゆえ過去・現在・未来それぞれの時間的イメージの関連性も合わせて検討する。

II. 方法

1. 対象者

対象者は公立小学5年生、6年生、公立中学1年生、2年生、公立高等学校1年生・2年生、私立高等学校1年生・2年生であり計1729名であった。内訳はTable 1に示す通りである。

2. 調査手続き

予め質問紙の実施要領を学級担任に説明し、それぞれの学級ごとで学級担任より一斉に質問紙を実施した。

3. 質問紙内容

(1) 未来展望：「希望」内容の自由記述

「希望」には現実的な内容でなくともファンタジーや非現実的な内容も含まれると捉え、「将来何にでもなれ、何でもできるとします。将来あなたがしたいこと、なりたいたいのを教えてください」と教示し自由記述を求めた。その際Fig.1-1に示した図を用いた。

(2) 未来展望：「展望」内容の自由記述

「展望」とは「どうなっていると思うか」という未来への見通しと捉え、「タイムマシンが完成したぞ。『高校卒業後の君』、『25歳の君』まで案内しよう。将来の自分を見てきて、その様子を教えてください。」と教示し自由記述を求めた。その際、Fig.1-2に示した図を用いた。

Table 1
調査対象者内訳

所属 学年	小学校		中学校		高校生		計
	5	6	1	2	1	2	
男児(人)	14	15	49	45	288	401	812
女児(人)	24	22	43	60	354	424	927
総計(人)	38	37	92	105	642	825	1739



あなたは将来何にでもなれて、何でもできるとします。将来あなたが「したいこと」や、「なりたいもの」を教えてください。「こんなことしたいなあ」とか「こんなことしていたら楽しいのになあ」とか「こんな人になっていないなあ」とか何でも構いません。

Fig.1-1 「希望」測定教示内容



タイムマシンが完成したぞ。君を乗せてあげよう。「高校卒業後の君」、「25歳の君」まで案内しよう。将来の自分を見てきて、その様子を教えてください。

Fig.1-2 「展望」測定教示内容

(3) 過去・現在・未来イメージ

過去・現在・未来のイメージを測定する尺度として都筑(1998)が作成した時間的態度尺度を小・中学生にも分かりやすいように言葉を変えて使用した。これは15の形容詞対からなるSD法尺度であり、現在・過去・未来に関する時間的な態度を一元的に測定する尺度として信頼性が検証されている。それぞれ「あなた自身の過去(現在, 未来)を思い浮かべた時、今までのあなたはどのようにイメージされますか? 一列の端と端に反対の意味の言葉が書いてあります。二つの言葉のうち、あなた

の過去(現在, 未来)のイメージに近いところに○をつけてください。」という教示で7段階評定するように求めた。

4. 自由記述分析カテゴリー

「希望」・「展望」内容の検討のため、山田(1989)高垣(1974)を参考にカテゴリーを設定し記号化して分析を行った。個々の自由記述がどの分析カテゴリーに該当するかの判定の信頼性を得るため、複数の心理学専攻の大学院生で判定し一致したカテゴリーを用いた。

Table 2
「希望」「展望」内容分析カテゴリー

B. 身体的側面 (健康, 容姿, 運動能力)	長生き, きれいな人, 足が速くなる
P. 心的側面 (才能, 性格, 対人態度, 価値観)	頭よくなる, 人に優しい人, 何事もあきらめない
S. 社会的側面 (家族・友人・異性関係)	幸せな家族, 仲間とずっと一緒に, 好きな人のお嫁さん
L. 生活的側面 (日常生活, 生活態度, 金銭)	一人暮らし, のんびり暮らす, 金持ち 家を買う
A. 行動的側面 (勤勉・遊び・運動)	勉強する, 仕事する, 遊んで暮らす 旅行
T. 時間的側面 (過去・未来)	昔を悔いる・将来について考える
J. 職業 (援助職, スポーツ選手, 芸能関係, 技術職, バイト, 一般職, サービス業)	看護師, 福祉職, プロ野球選手, 女優, ダンサー, 自動車整備士, 会社員, スチュワーデス
ST. 社会地位	有名人, 偉い人
C. 特定の集団への所属 (学校・会社)	東京の大学, **専門学校, トヨタに入社
F. 空想的	魔法を使う
D. 分からない	分からない, 想像できない

Table 3
「展望」の感情評価分析カテゴリー

カテゴリー	具体例
N 中性的評価	仕事している
+ 積極的評価	頑張っている 充実している
- 消極的評価	つまらない生活
± 積極的評価と消極的評価の葛藤	楽しい生活・世の中そんなに甘くないからきつい生活をしているかも

Table 4
過去・現在・未来イメージ尺度の因子分析結果 (第1因子のみ)

カテゴリー	過去 ($\alpha = .87$)	現在 ($\alpha = .88$)	未来 ($\alpha = .91$)
楽しいーさびしい	.693	.736	.782
満足したーむなしい	.667	.740	.765
美しいーみにくい	.661	.699	.766
魅力あるー魅力ない	.657	.724	.777
あたたかいー冷たい	.627	.654	.769
明るいー暗い	.698	.745	.809
希望あるー希望ない	.668	.710	.856
大切なー大切にない	.677	.717	.825
大きいー小さい	.552	.622	.686
良いー悪い	.719	.777	.840
変化あるーつまらない	.675	.698	.759
開かれたー閉じられた	.724	.747	.803
生き生きー活気のない	.817	.832	.858
積極的ー受身的	.539	.568	.696
寄与率	45.25%	51.09%	61.88%

(1) 「希望」・「展望」の内容面の分析カテゴリー

「I. 自己の特性に関する記述」「II. 社会繋留的な記述 (社会的集団への所属や社会的役割に関連させて定義する記述)」「III. その他」という3つの上位カテゴリーに「身体的側面」「心的側面」「職業」等の下位カテゴリーを持つ、35のカテゴリーを設定した (Table 2)。

(2) 「展望」の感情評価分析カテゴリー

「展望」に対する感情評価を測定するカテゴリーとして Table 3 に示すように4カテゴリーを設定した。

III. 結果

(1) 観測変数の吟味：過去・現在・未来イメージ

過去・現在・未来イメージ別に最尤法による因子分析を行った。負荷量の低い1項目を削除した結果、固有値の落ち込みから1因子構造が妥当であると判断した (Table 4)。したがって14項目の合計得点を「未来イメージ得点」「現在イメージ得点」「未来イメージ得点」とし、

Table 5
「過去・現在・未来イメージ得点」の相関

	過去イメージ	現在イメージ
現在イメージ	.54**	
未来イメージ	.45**	.53**

** $p < .01$

それぞれ得点が高いとイメージが肯定的であると見なした。

①過去・現在・未来イメージの相関

過去・現在・未来イメージ得点の相関分析を行ったところすべての組合せにおいて、1%水準で有意な相関が見られ、それぞれが相互に関連することが示された (Table 5)。

②過去イメージの発達の变化

学年ごとで、各得点に差があるかどうか検討するため、過去イメージ得点に対し学年(6：小6，中1，中2，高1，高2)を要因とする1要因分散分析を行った。その結果、有意な差は認められなかった (Fig.2)。

③現在イメージの発達の变化

年代ごとで、各得点に差があるかどうか検討するため、現在イメージ得点に対し学年(6：小5，小6，中1，中2，高1，高2)を要因とする1要因分散分析を行った。その結果1%水準で学年の主効果が示されたので (F (5,1762)=8.06, 3.02, 9), Bonferroni の多重比較を行った。その結果、小学6年生、中学1年生が小学5年生、中学2年生・高校1年生・高校2年生に比べ有意に得点が高いことが示された (Fig.3)。

④未来イメージの発達の变化

学年による未来イメージ得点の差異を検討するため、未来イメージ得点に対し学年(6：小5，小6，中1，中2，高1，高2)を要因とする1要因分散分析を行った。その結果1%水準で学年の主効果が示されたので (F (5,1762)=9) Bonferroni の多重比較を行った。その結果小学6年生が中学2年生に比べて有意に得点が高かった (Fig.4)。

(2)「希望」と「展望」のカテゴリー分析

乱数表を用いてそれぞれの学年から40名ずつを無作為に抽出し、240名の「希望」「展望」の自由記述の内容を上記カテゴリーに分類した。また、前述のように「展望」に関しては内容面と共に「展望」の感情的評価についても分類を行った。さらに「展望」の内容が「希望」を実現化する行動であるかどうかの一致度の判定も行った。

①「希望」と「展望」の内容の比較

「希望」で出現する内容と「展望」で出現する内容に差異があるかどうか検討するため、「希望」内容出現カテゴリー数と「展望」内容出現カテゴリー数に関して χ^2 検定を行い、さらに残差分析を行った (Table 6)。その結果、「希望」内容において、「F：ファンタジー」($\chi^2=6.69, df=1, p<.01$)「J：職業」($\chi^2=50.41, df=1, p<.01$) (J1：援助職 ($\chi^2=10.75, df=1, p<.01$), J3：芸能人 ($\chi^2=9.83, df=1, p<.01$), J4：技術職 ($\chi^2=36.37, df=1, p<.01$), J7：サービス業 ($\chi^2=12.39, df=1, p<.01$), J8：その他 ($\chi^2=5.03, df=1, p<.05$))「L4：所有」($\chi^2=21.05, df=1, p<.01$)「ST：社会的地位」($\chi^2=5.32, df=1, p<.05$)「P：心理的側面」($\chi^2=25.39, df=1, p<.01$) (P2：対人態度 ($\chi^2=14.12, df=1, p<.01$), P4：価値観 ($\chi^2=5.89, df=1, P<.05$))が「展望」内容より有意に多く出現していることが示さ

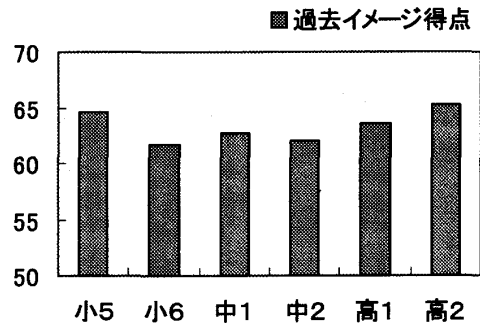


Fig.2 「過去イメージ得点」における学年ごとの比較

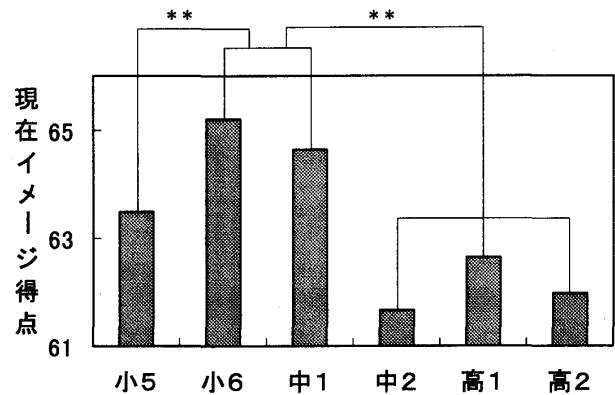


Fig.3 「現在イメージ得点」における学年ごとの比較

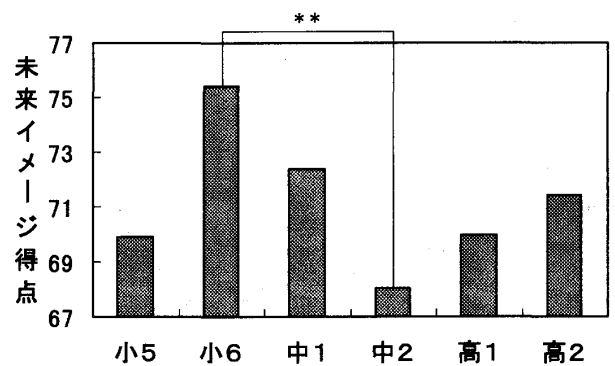


Fig.4 「未来イメージ得点」における学年ごとの比較

れた。また、「展望」内容において、「D：分からない」($\chi^2=5.63, p<.05$)「A：行動」($\chi^2=67.83, df=1, p<.01$) (A1：勤勉 ($\chi^2=108.26, df=1, p<.01$), A3：運動 ($\chi^2=5.02, df=1, p<.05$))「C：特定集団への所属」($\chi^2=44.63, df=1, p<.01$) (C1：大学 ($\chi^2=44.37,$

df=1, p<.01))」「J 6：一般職($\chi^2=15.71$, df=1, p<.01)」「D：分からない($\chi^2=5.03$, df=1, p<.05)」「L1：生活集団($\chi^2=6.69$, df=1, p<.01), L2：生活感情($\chi^2=3.82$, df=1, .05<p<.10)」「T：時間的展望($\chi^2=12.88$, df=1, p<.01) (T1：過去への態度($\chi^2=3.54$, df=2, .05<p<.10), T2：未来への態度($\chi^2=9.40$, df=1, p<.01))」が有意に「希望」内容よりも多く出現していることが示された。

Table 6
「希望」「展望」の 카테고리出現数

	「希望」内容 出現数	「展望」内容 出現数
「希望」に多く出現したカテゴリー		
J：職業	278**	90**
L4：所有	44**	6**
ST：社会的地位	14*	3*
P：心理的側面	46**	5**
B：身体的側面	10	6
「展望」に多く出現したカテゴリー		
D：分からない	19**	32*
A：行動	40**	147**
C：特定集団への所属	5**	52**
J6：一般職	1**	16**
L2：生活感情	21**	31**
L1：生活習慣	16**	30**
合計	528	445

** p<.01, * p<.05

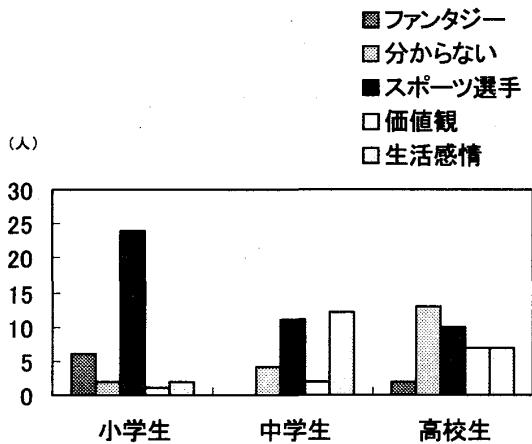


Fig.5 「希望」内容カテゴリーの年代別出現数

②「希望」内容の発達的变化

各年代によって「希望」内容カテゴリーに差異があるか検討するため、各年代ごとの「希望」内容カテゴリー数において χ^2 検定を行った。その後残差分析を行った。その結果、「F：ファンタジー」は小学生に有意に多く、中学生に有意に少ないことが示された ($\chi^2=6.56$, df=2, p<.05)。「D：分からない」は高校生に有意に多く、小学生に有意に少ないことが示された ($\chi^2=11.28$, df=2, P<.01)。「J 2：スポーツ選手」は小学生に有意に多く出現し ($\chi^2=6.55$, df=2, p<.05), 「P4：価値観・意見」は高校生に多く出現している ($\chi^2=6.59$, df=2, p<.05) ことが示された。「L2：生活感情」は中学生に有意に多く、小学生に有意に少ないことが示された ($\chi^2=$

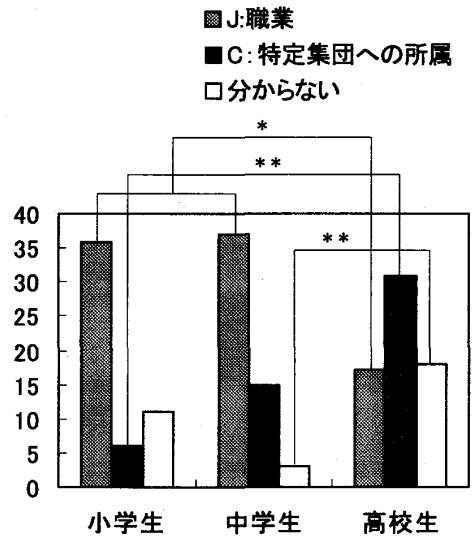


Fig.6 「展望」内容カテゴリーの年代別出現数

** p<.01 * p<.05

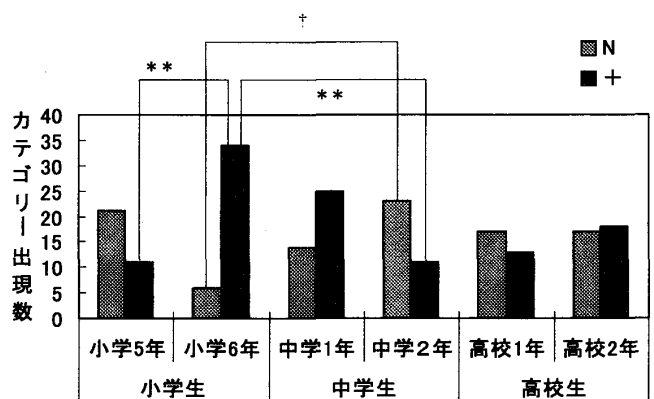


Fig.7 「展望」の感情評価の年代別出現数

** p<.01 † p<.10

6.29, $df=2$, $p<.05$)。結果は Fig.5 に示す。

③「展望」内容の発達の变化

各年代によって「展望」内容カテゴリーに違いがあるか検討するため、各年代ごとの「展望」内容カテゴリー数において χ^2 検定を行った。さらに残差分析を行った。その結果、「D：分からない」が高校生に有意に多く、中学生に有意に少なく出現 ($\chi^2=10.02$, $df=2$, $p<.01$) し、「特定集団への所属」は高校生に多く、小学生に少なく出現した ($\chi^2=15.92$, $df=2$, $p<.01$)。また、「J：職業」は高校生に有意に少なく出現した ($\chi^2=7.45$, $df=2$, $p<.05$)。結果は Fig.6 に示す。

④「展望」の感情評価の発達の变化

各学年により「展望」感情評価カテゴリーに違いがあるか検討するため、各学年ごとの「展望」感情評価カテゴリー数において χ^2 検定を行った。さらに残差分析を行った結果 (Fig.6)、「+：積極的評価」が小学6年生で有意に高く、小学5年生・中学2年生で有意に低かった ($\chi^2=22.786$, $df=5$, $P<.01$)。また、「N：中性的評価」は中学2年生が小学6年生に比べ有意傾向で高いことが示された。 ($\chi^2=10.980$, $df=5$, $.05<P<.10$)。結果は Fig.7 に示す。

⑤「希望」と「展望」の一致率の発達の变化

各年代によって、「希望」と「展望」の内容の一致率に差異があるか検討するため、「希望」と「展望」が一致しているかどうか臨床家により判定し、一致していると判定された人数に対し χ^2 検定を行った。その結果、各年代間において一致率に有意な差は見られなかった。個人内で「希望」「展望」が一致するのはどの学年も約40%であった。

IV. 考 察

(1)「未来展望」の二つの側面：「希望」と「展望」について

「希望」「展望」の内容カテゴリーの分析により、内容面において差が見られたことから、「未来」という側面は一次元的なものではなく「希望」「展望」という内容の違う次元で構成されていることが示されている。

「希望」に、より多く出現したカテゴリーとしては「ファンタジー (魔法使いになりたい)」「職業：芸能人・技術職・援助職」「所有 (大金持ちになりたい)」「社会的地位 (有名になりたい)」「対人態度 (信頼される人)」「価値観」である。このことより、「希望」は「ファンタジー」に特徴付けられるように、自己の能力や資質から直接関連しないような非現実的な側面も含むことが示され

ている。さらに「社会的地位」「職業：芸能人・技術職・援助職」「所有 (お金持ち)」などや「対人態度」「価値観」といった自己の内面の豊かさを望む内容が多く出現している。つまり「希望」とは、自己の能力に捉われない非現実的な内容を含みさらに生活の指針などを含めた抽象的な「未来」の側面であり、現実性の低いものも含むと考えられる。

「展望」により多く出現したカテゴリーとしては「分からない」「行動 (働いている)」「特定集団への所属 (**大学に行っている)」「生活感情 (のんびり暮らしている)」「日常生活 (結婚している)」「一般職 (サラリーマン)」「時間的展望 (将来のことを考えている)」である。「展望」の内容として「具体的な行動」や「生活の様子」、または「特定集団への所属」といった具体的で現実的な内容が頻出していることから、「展望」が「未来」の側面でも非常に具体的・現実的な部分であり現実性の高い側面であることが示されている。現実的な内容が多く出現するのは「展望」が「未来への見通し」であり、自己の能力や置かれた環境など自己の社会的現実に見合った内容を出したためであると考えられる。さらに「わからない」という反応も有意に多いことから、「展望」とは、具体的に描けるか、もしくは分からないかという非常に極端な構造になっていると考えられる。

さらに「希望」と「展望」の一致率を検討したところ、約40%の児童・生徒は「希望」と「展望」に同じ未来像を描いていた。つまり、「希望」と「展望」とは個人内で明確に分かれているのではなく、現実性を軸に一つの連続体のような構造を成しているのではないかと考えられる。より現実性が強くなるにつれ「希望」は「展望」に近づいていくのであろう。しかし一方で裏を返すと、約60%の児童は「希望」と「展望」に異なる未来像を描いていた。どの学年の児童・生徒も「こうなりたい」という未来像と「こうなるだろう」という未来像が異なっているおり、異なる未来像を個人内で保持していることが示された。「希望」は漠然としていて抽象的ではあるが願望や期待を含んだ児童の望むものであり、一方「展望」は具体的に現実的な未来像である。例えるなら、「希望」とはいわば児童が未来に向かって進んでいく「方位磁石」のようなものであり、「展望」は具体的な自分の未来の「地図」のような役割を果たすのではないかと推察される。どちらも児童が生きていく力になっていくものであると考えられる。

(2)「希望」「展望」の発達の变化

「希望」と「展望」の内容には各年代において差異があることが示された。このことから、「希望」「展望」という「未来展望」はそれぞれの年代によって異なる傾向

を持つということが示された。

小学生は「希望」としては「ファンタジー」「スポーツ選手」などを多く持っていることが示されており、また「展望」としては、「特定集団への所属」が少ないことが示されている。小学生の持つ「未来展望」とは抽象的で空想的な内容を含みやすいことが示されている。また展望としても具体的な内容が伴わない未来像であり現実性は低い段階にあることが示された。中学生は「希望」として「ファンタジー」が有意に少なくなり、「生活感情」が多いことが示されている。また「展望」としては「分からない」が有意に少なくなっている。つまり中学生は「希望」としても空想的な内容が減り、「生活感情(のんびり)」といった心の豊かさを望む内容が増加することが示されている。小学生に比べより具体的な生活の仕方や生活する上での感情を想起している。この点で現実性は小学生に比べ高まることが示されている。高校生は、「希望」としては「価値観(何事もあきらめない等)」が増加し「展望」として「特定集団への所属」が増加する。他方で「希望」「展望」とともに「分からない」という反応が増加する。このことから高校生は「未来展望」という将来の自己像を想起することが困難になると思われる。想起できる未来の側面としては「特定集団への所属」という非常に具体的な内容か「価値観」という心的な方針のみが表出されている。高校生は進路選択に直面化する時期であり、この時期に多様な未来像を描く難しさが示されていると考えられる。しかし多様ではないが「価値観」のような自分が生きていく上での指針になるようなものが想起できることは特記に値すると思われる。つまり、多様な未来像は想起できないものの、自己の人生の「生き方」について考えを深める時期ではないかと考えられる。

(4) 過去・現在・未来イメージの変化について

「過去イメージ得点」「現在イメージ得点」「未来イメージ得点」の相関分析を行ったところ、すべての組合せにおいて $r = .42$ 以上の相関が得られた。このことから、「過去」「現在」「未来」と時間的には異なる側面についてのイメージであるが、相互に関連を示し、それぞれ連動するような性質を持つことが示されている。

学年による差異を検討したところ「過去イメージ」以外の項目はすべて学年間で差が見られた。つまり「過去イメージ」以外の項目はすべて発達段階における変化があるということが示されている。「現在イメージ」「未来イメージ」は小6・中1で有意に高く、中2・高1・高2が有意に低いことが示されている。中学1年から2年の間に自他の捉え方が変容されていくと考えられる。

さらに、児童の「展望」に対する感情評価を検討したところ、未来像に「頑張っている、充実している」とポ

ジティブな評価するのは小学6年生で多く、中学2年生で有意に少ないことが示された。また中2で「働いている」など感情評価的なものを含まない事実のみの記述が多く見られた。前述したように「現在イメージ」「未来イメージ」が中学2年生で低下することを併せて考えても、中学2年生という時期に生徒は自己や環境という現実と直面する中で、現在イメージ、未来イメージともに低下させ、「展望」としても生き生きしたものでなく、事実のみを想定するに留まらせるのではないかと考えられる。

V. 結論

青年期における未来展望の内容について検討を行ったところ、「未来展望」は「希望」と「展望」という現実性・具体性の水準が異なる2側面により構成されていることが示された。「希望」は空想的な内容も含む願望や期待で構成されておりより現実性の低い未来の自己の側面である。「展望」は具体的な生活の仕方から特定の集団への帰属等を含む現実的で具体的な未来の自己の側面である。さらに、両者は境が曖昧な連続体のような構造であり、明確に分かれているものではないことも示唆された。発達のな変化を検討すると、小学生は自身の「希望」として空想的な内容を想起し、現実的な未来像は想起することが難しいことが示された。中学生、高校生になるにつれ、空想的な内容は減少し、どのように生活するのかという内容やどのように生きていくのかという価値観を伴う内容が「希望」として表出され、具体的に現実的な「展望」を表出するようになることが示された。一方で高校生は「希望」も「展望」も表出することが難しくなり、自己の未来像を想起することが難しくなることも示された。現実的な自己の未来像を想起するということは、まさに現在の現実の自己に対峙することであり、進路選択等現実と直面している高校生はこのような自己に直面化する場面を回避しようとしたのではないかと考えられた。

また、過去・現在・未来の時間的イメージについて検討を行ったところ、過去・現在・未来イメージは相互に強く関連し影響しあうことが示された。発達のな変化を検討すると「現在イメージ」「未来イメージ」は中学2年生以降低下することが示された。中学1年生から2年生にいたるこの時期に現実と直面することも多く、自他への捉え方を変化させるのではないかと考えられたが、さらなる検討が必要である。

本研究は質問紙を用いた調査研究であった。今後臨床的活用等を踏まえても、個人が自身の未来にどのような未来像を描き、どのような意味づけをするのかということに関してより詳細に検討する為には方法論をより洗練

する必要が考えられる。

付 記

本論文は日本発達心理学会第16回大会にて発表したものを加筆修正したものである。

謝 辞

本研究実施にあたりご協力頂きました児童・生徒の皆さん、ならびに先生方に深く感謝いたします。また、ご指導頂きました九州大学針塚進先生に心よりお礼申し上げます。

引用文献

- Erickson M.H. 森俊夫・瀬戸屋雄太郎 (訳) (2002). 催眠療法における一方法としての時間の偽定位. 現代思想, 30(4), pp130-154
(Erickson M.H. 1954 Pseudo-Orientation in Time as a Hypnoterapeutic Procedure. The College Papers of Milton H. Erickson on hypnosis ;Vol 4)
- 勝俣瑛史 (1992). 希望の心理学 教育と医学, 38, 309-314
- レヴィン, K. 末永俊郎 (訳) (1954). : 社会的葛藤の解決—グループ・ダイナミクス論文集— 創元新社. pp134-164. (Lewin, K. (1942). Time Perspective and Morale, Second Yearbook of the Society for the Psychological Study of Social Issues, ed. Goodwin Watson, Chapter IV : Houghton Mifflin.)
- レヴィン, K. 猪股佐登留 (訳) (1974). : 社会科学における場の理論 誠信書房
(Lewin, K. (1951). Field Theory and Social Science. New York : Herper.)
- 森 俊夫・黒沢幸子 (2002). タイムマシン・クエスチョン—未来志向アプローチにおける一技法—
- 高垣忠一 (1974). TST にあらわれた反応の心理的負荷について 京都大学教育学部紀要 X X
- 飛永佳代 (2005). 青年期における未来展望の様相—「希望」と「展望」という視点から 日本発達心理学会第16回大会発表論文集, 478
- 都筑 学 (1982). 時間的展望に関する文献的研究 教育心理学研究, 30, 73-86
- 都筑 学 (1999). 大学生の時間的展望 中央大学出版部
- 都筑 学 (2004). 希望の心理学 ミネルヴァ書房
- 山田ゆかり (1989). 青年期における自己概念の形成過程に関する研究—20答法での自己記述を手がかりとして— 心理学研究, 第60巻第4号